

## 講演 「万葉恋歌」

平成 24 年 6 月 24 日(日)  
桜井市立図書館第一研修室

県立万葉文化館古代学研究所主任研究員 井上さやか

万葉恋歌 美しいだけでなくどろろしたの内容の歌を中心に述べたい。  
いつもは 1 時間半が標準。60分に以内でやりたい。  
今展覧会を開催の画家の松村公嗣氏は桜井市の出身 奈良県立万葉文化館へ是非お越しください。

### 桜井というと必ず思い出す歌は次の 2 首

<万葉集 巻 12-3101 番>

紫は 灰指すものぞ 海石榴市の 八十のちまたに 逢へる児や誰

むらさきは はひさすものぞ つばいちの やそのちまたに あへるこやたれ

<万葉集 巻 12-3102 番>

たらちねの 母が呼ぶ名を 申さめど 路行く人を 誰と知りてか

たらちねの ははがよぶなを まをさめど みちゆくびとを たれとしりてか

桜井というと欠かすことができない歌。古代は大きな木の根元に市が立つ。当時は歌垣といい、村を越えて結婚相手を探す習慣があった。歌をうまく返せないと結婚できない。海石榴市というのは桜井市金屋。初めて、出あって、心に通って人に歌いかける。大きな樺の木があった。多くの道が集まっていた。すべてのみちは海石榴市に通ずる。

当時のプロポーズはまず名前を聞くこと。万葉集第 1 巻の巻頭、雄略天皇の歌は求愛の歌。結婚により勢力範囲に取り込んでいく。一夫多妻制はあたりまえ。恋の歌の基本は名前を聞くことにある。

今は簡単に紫の衣類を着ることができるが、古代は貴重で高貴なもの。染料として使うときムラサキの根っこを灰にして使う。紫は女性をたとえる。今でも美しいけれど、自分を受け入れるともっときれいになる。「チ」というのは父や血や霊力などすべての源をいう。ものが充足している状態。当時女性は本名と通称を使い分けていた。紫式部や和泉式部も本名ではない。結婚相手と決めた人しか本名を教えない。教えてもいいが簡単には教えない。一旦はことわるのが当時の作法。歌垣は丸一日つづくことがある。歌われた場所が海石榴市というのは桜井にとって重要なこと。

20 巻 4500 以上ある万葉集を簡単には説明できない。

<万葉集 巻 4-608 番> 作者は笠かきの郎女いらつめ

相思はぬ人を思ふは大寺の餓鬼の後方に額つくごとし

あひおもはぬ ひとをおもふは おほてらの がきのしりへに ぬかづくがごとし

恋歌として紹介すると、ある青年貴族に恋した女性が、自分はこれだけ彼のことが好きなのに彼は思いを返してくれない。大きなお寺の餓鬼像の後ろから、ひれふしておがんでいようなものだ。四天王が踏みつけている餓鬼像のイメージ。まず聞いてもらえない、何をやっているかわからない。何ともかいたない話という恋愛のむなしさを読んでいる。当時は結婚しても同居しない通い婚。男性に通ってもらいたい一心で歌を表す。女性から男性に呼びかける歌が多い。このテーマそのものが喜ばれた。日本の文字そのものが中国文学の影響下にある。

楽しい恋歌より、悲しいものしか残っていない。現在でも悲しい不幸なゴシップの方が噂されやすい。悲しいものが文学のテーマに取り上げられやすい。

<万葉集 巻 11-2651 番>

難波人 葦火焚く屋の 煤してあれど おのが妻こそ 常めづらしき

なにはひと あしひたくやの すしてあれど おのがつまこそ つねめづらしき

結婚している男女間の歌。一夫多妻が当たり前。戸籍は当時からあるけれど、同居はしな

い。恋とは一人悲しむもの。誰か求める人がありながら会えない状態を恋という。当時は難波 大阪のあたりは海。上町台地以外は入り江状態。港にもなるし漁場にもなり、芦が生えている。芦は船の材料や屋根をふいたり燃料にするため身近な素材であった。顔がすすけている妻の顔が愛しいという恋の歌。夫のいとしい日常的な愛情が歌われていて、ほのぼのとするいい歌である。

<万葉集 卷 14-3400 番>

信濃なる 千曲の川の 細石も 君し踏みてば 玉と拾はむ

しなぬなる ちぐまのかはの さざれしも きみしふみてば たまとひろはむ

東歌の一首。小石はただの石だが、愛しいあなたが実際に触れたならば宝石に思える。他の人には何の意味もないが、好きな人が触ったものなら宝物になる。当時の人の気持ちを考えれば、万葉集の言葉は難解けれども身近に感じられる。

### 仁徳天皇の皇后磐之媛命（いわのひめ）の歌 4首

奈良時代に作られた歌と推定

古事記では嫉妬深い女性として歌われている。万葉集では人物像が違う

<万葉集 卷 2-85 番>

君が行き日(け)長くなりぬ山たづね迎へか行かむ待ちにか待たむ

あの方が旅に出て、もう何日も経った。山道を探しながら、迎えに行こうかしら。それとも、ただひたすら待っていようかしら。女性側が迎えに行くことはないが迷っている。

<万葉集 卷 2-86 番>

かくばかり恋ひつつあらずは高山の磐根(いはね)し枕(ま)きて死なましものを

これ程まで恋しさに苦しみつづけるのよりは、いっそ高い山の岩を枕にして死んだほうがましだ。激しい恋心を歌っている。岩とは古墳のイメージ。死者の描写。手枕は恋愛中。

草枕は旅行中のイメージ

<万葉集 巻 2-87 番>

ありつつも君をば待たむうち靡く我(あ)が黒髪に霜の置くまでに

じっとこうして、あの人の帰りを待とう。床に投げ出した私の黒髪に、白いものが交じるようになるまでも。古代は長い黒髪は女性の美の条件。深い執念が感じられる。皇后でありほかの男性は考えられない。

<万葉集 巻 2-88 番>

秋の田の穂の上(へ)に霧(き)らふ朝霞いつへの方に我が恋やまむ

秋の田に実った稲の穂並——その上にたちこめる朝霧は、いつのまにか消えてしまう。あれみたいに、私の恋心もどこかへ消えて行ってほしいのだけれど、いつまでも私の胸に立ちこめたままだ。夜だけ男性が通うのが普通の時代に、朝から女性が男性側に通うスキャンダラスな通常ではありえない歌。激しい恋の歌 4 首がストーリー仕立てになっている。

## 穂積皇子の歌 2 首

穂積皇子は天武天皇の皇子。但馬皇女も天武天皇の皇女で二人は異母兄妹。当時は母親が違えば結婚も許されたので、兄妹で恋仲になることも多かった。現在ではとても考えられない恋や結婚が、万葉の時代にはごく普通にあった。

<万葉集 巻 2-203 番>

降る雪は あはにな降りそ 吉隠の 猪養の岡の 寒からまくに

ふるゆきは あはになふりそ よなばりの みかひのをかの さむからまくに

但馬皇女が眠るお墓を遥かに見て悲しみ泣きながら詠んだという。切れぎれに、心よりしぼり出るように詠っているためか、皇子の、深い悲しみと彼女へのやさしさが伝わってくるすばらしい歌です。吉隠とは桜井市吉隠のこと。

<万葉集 巻 16-3816 番>

家にありし 櫃に鑱さし 蔵めてし 恋の奴の つかみかかりて

いへにりし ひつにかぎさし をさめてし こひのやつこの つかみかかりて

家にあった櫃にかぎをかけて、嚴重にしまっておいた恋の奴が、いつのまにかぬけ出して、私につかみかかって、私を苦しめることだ

穂積皇子は宴がたけなわになり酒に酔うと、好んでこの歌を歌い、いつまでももてはやしたと言う。

古事記や桜井に関係ある恋歌を簡単に説明した。

以上